

子どもたちは読解力を何によって身につけるのか

子どもたちの読解力低下が騒がれてから久しい。騒ぎになったのは、世界79カ国、約60万人の15歳児を対象とした国際学力テスト「国際学習到達度調査（PISA 調査）」で、2018年の結果が、前回（2015年）の8位から15位へと順位を落としたからである。中学生の半数が教科書を理解困難であるというマスコミ記事を目にしたことさえある。

それ以前は本当のところ、どうだったのだろうか。7月参院選で当選した中条きよし氏が、「うそ」で日本レコード大賞の大衆賞を取ったのが1974年。山口洋子氏作詞のその歌い出しは「折れた煙草の吸いからあなたの嘘がわかるのよ」だった。煙草の吸いからで恋人の嘘を見抜くのだから、その当時の日本人の読解力は世界有数だったと推察される。（半分は本気で言ってます、悪しからず）

話を現在に戻すが、文部科学省は、基礎的読解にも行き詰まる子どもたちが多くなっていることに危機感を持ち、国語の授業では文学など鑑賞している場合ではない、もっと基礎的な実用文の読解を強化しなければならないと考えたのかも知れない。「現代文」が大きく「論理国語」と「文学国語」に分けられたのは周知のとおりである。私自身も国語教員として30年以上教壇に立ったのであるから、これに関する意見は当然ある。だが、ここでは「文学」なるものの効用を今さら述べるつもりはない。ただ言えるのは文学的なものは「教科書」や「本」以外にもあり、私自身そうしたものから自然に、表現の面白さや難しさを学んだことも少なくなかったということである。異論のある方は、シンガーソングライターのボブ・ディランがノーベル文学賞を取っていることを思い出してくださいね。

さて、ロックや映画の世界における「邦題」なるものに興味を持ったことはありませんか。でたらめなものもありますが、これが実に楽しいのです。そうしたモノからも表現の面白さや難しさは学べると言うのとげさでしょうか。ちなみに、一番のオススメはギタリスト・ジェフ・ベックのアルバム「BLOW BY BLOW」（1975年発売）の邦題「ギター殺人者の凱旋」。映画『愛と青春の旅だち』（1982年公開）の原題は「An Officer and a Gentleman（直訳するなら、ただの「士官と紳士」）」。この邦題をつけた人のセンスは好き嫌いが分かれるところかもしれませんが、この邦題が大ヒットにつながったことは間違いないでしょう。（「旅立ち」でないところにも工夫が感じられます）探偵ドラマ「プロハンター」の第6話「俺の愛した赤い靴」（1981年放送）。もちろん、赤い靴は主人公が愛した女性のことで、ホンモノの靴のことを言っているわけではありません！ 比喻や擬人化は、テレビドラマからでも学べるわけです。

大上段に構えなくとも、さまざまな場面で「読解力」は身につくし、そう考える方が自然なことに思えます。ウィーンの名ピアニスト、ルドルフ・ブッフビンダー氏（75歳）は、読書したり絵を描いたりした時間の方が、鍵盤を触っていた時間より長かったと語ったそうです。ちなみに、これが紹介された記事（7月10日の朝日新聞）のタイトルは「『余白』の使い方 教える教育」でした。子どもたちに時間を返してやって、その時間をどう使わせるか、そのことをもっと考えても良いようにも思います。以上、夏休み中に生徒の声が聞こえない校長室でふと考えたことでした。

令和4年8月5日

大村城南高等学校長 中小路尚也